

増山浩人(日本学術振興会・慶應義塾大学)

美学の創始者として知られる A. G.バウムガルテンは、形而上学を「人間的認識における第一諸原理に関する学」(M. §. 1)と定義した。カントは、『純粋理性批判』や講義録において、この定義を繰り返し批判している。本発表では、バウムガルテンの形而上学定義に対するカントの批判の狙いが、いわゆる「超自然学」としての形而上学を復権させることにあったことを明らかにする。

まず、バウムガルテンの形而上学定義の特色を明らかにする。具体的には、彼が形而上学を「学問基礎論」としてとらえ直したことを示す。この点は、彼の『形而上学』の「世界論」部門、「心理学」部門、「自然神学」部門の導入部の記述から裏づけられる。まず、「世界論」部門の導入部には、「世界論は心理学、諸神学、自然学、目的論、実践哲学の第一諸原理を含むので、世界論が形而上学(§.1)に属するのは(§.2)当然である」(M. §. 352)という記述がある。さらに「心理学」部門の導入部には、「心理学は、諸神学、美学、論理学、実践的諸学の第一諸原理を含むので、心理学が形而上学(§.1)に属するのは(§.2)当然である(§.501)」(M. §.502)という記述がある。最後に、「自然神学」部門の導入部には、「自然神学は、実践哲学、目的論、啓示神学の第一諸原理を含む」(M. §. 801)という記述がある。

以上の記述によれば、世界論、心理学、自然神学という三つの学科が形而上学に属するのは、これらの学科が美学、論理学、実践哲学といった他の学問で使用される基礎概念・基礎原則を定義するからである。例えば、美学は「感性的認識を完全にするための規則は何か」を問う。しかし、この問いに答えるためには、あらかじめ、感官、構想力といった認識能力が心理学において定義されてなければならない。したがって、心理学は形而上学に属すると言うことができる。このように、彼は、他の学問を基礎づける上位の学問群が形而上学だと主張したのである。

しかし、このバウムガルテンの形而上学定義は、形而上学史の中で、特異な位置を占める。形而上学は、*metaphysica* という原語が示すように、何らかの意味で自然、あるいは自然学を超えた対象を扱う学として理解されてきた。しかし、バウムガルテンは、形而上学の定義を行う際に、こうした *metaphysica* という語の持つ含意を全く考慮していないのである。

次に、以上の考察を踏まえ、カントのバウムガルテン批判の特色と狙いを明らかにする。『純粋理性批判』の「方法論」において、カントは、バウムガルテンの形而上学定義をまとめた形で批判している。カントの理解によれば、バウムガルテンは、学を持つ普遍性の度合いに応じて、形而上学に属する学とそうでない学を区別したという。しかし、カントは、この手法について、皮肉をこめて以下のように述べている。

「同じように、私は尋ねる。「延長体の概念は、形而上学に属するか?」、諸君は「然り!」と答える。「そうか。では物体の概念もか?」、「然り!」。「では、液体の概念は?」。諸君は面を食らう。というもの、そのようにさらに進んでしまった場合、全てが形而上学に属することになってしまうからである。このことから以下のことがわかる。従属の単なる程度(特殊を普遍の下に包摂すること)は学のいかなる限界も規

定できない。我々の場合、この限界を規定するのは、起源の全面的な異種性と相違性なのである。」(B. 871f.)

このように、カントは、バウムガルテンの形而上学定義が、形而上学とそうでない学の境界をはっきり区別できない点を問題視していたのである。

この問題点に対処するために、カントは、形而上学を、*metaphysica* という原語にそくして、「超自然学」として定義し直そうとした。そのために、カントは、何らかの意味で経験の領野＝自然を超えた認識を扱う学を形而上学と位置付けたのである。この点は、『プロレゴメナ』の以下の記述から裏づけられる。

「形而上学的認識は、自然的認識ではなく、超自然的認識、つまり経験の彼方にある認識であるべきだからである。したがって、本来の自然学の源泉をなす外的経験も、経験的心理学の基礎をなす内的経験も、この認識においては根底にないだろう。したがって、この認識はアプリアリであり、あるいは純粋悟性と純粋理性に基づくのである。」(IV 265f.)

とはいえ、この「超自然学」としての形而上学の復権はどのように行われるのか。その鍵となるのが、カントの提唱した「純粋理性の自然学(*Physiologie der reinen Vernunft*)」という学科である。カントは、「純粋理性の自然学」を物体論と心理学からなる「内在的自然学(*immanente Physiologie*)」と世界論と神学からなる「超越的自然学(*transzendente Physiologie*)」に区分する。その上で、彼は、この二つの自然学が形而上学に属すると主張している。それは、この二つの自然学が、それぞれ異なる意味で自然を超えたものに関する認識にかかわるである。

まず、「超越的自然学」の対象である世界と神は、そもそも経験不可能である。したがって、この対象に関する何らかの知は、自然を超えた認識と言うことができる。他方、物体と心は、確かに自然の一部である。しかし、カントによれば、現象としての物体と心を可能にするアプリアリな原則(ex. 因果律)は、人間の悟性に起源を持つ。「内在的自然学」の対象は、このような物体と心の持つ経験に属さない側面に関する認識なのである。このように、「純粋理性の自然学」の導入によって、カントは、超越論哲学としての存在論のみならず、世界論、心理学、神学も「超自然学」としての形而上学に属することを正当化したのである。

以上の議論を通じて、本発表では、「超自然学」としての形而上学の復権を図っている点で、カント哲学が伝統回帰の側面も持っていることを明らかにしたい。

#### 参考文献

Baumgarten, A. G. *Metaphysica/ Metaphysik historische kritische Ausgabe*, Gawlick, G.; Kreimendahl, L. (übersetzt, eingeleitet und herausgegeben), Frommann-Holzboog, 2011.

Kant, I., *Kants Gesammelte Schriften*, herausgegeben von Der königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, de Gruyter, Bd.I-XXIX, Berlin, 1902-

増山浩人、『カントの世界論—バウムガルテンとヒュームに対する応答—』、北海道大学出版会、2015年。

増山浩人、「バウムガルテンのモノドロギー」、『哲学年報』、北海道哲学会、62号、2016年、53-70頁。